

東日本大震災

日本ユニセフ協会

緊急・復興支援活動

2年レポート

—子どもにやさしい復興をめざして



## ごあいさつ



みなさまからの後押しに励まされ、ユニセフ本部から託されるかたちでほぼ半世紀ぶりとなる日本国内での支援活動を開始してから、2年の月日が経とうとしています。

震災直後、多くの団体、企業のみなさまのご協力や、世界中の現場から被災地入りしたユニセフの日本人職員の力により、飲料水や衣類などの物資の配布や、避難所での「子どもにやさしい空間」作りなどから始まった活動は、ほんの数日の間に母子保健サービスや学校再開の支援へと拡大していきました。途上国でユニセフが長年にわたって培ってきた知見が、日本で次々と活かされていくのを実感したのがつい昨日のように思い出されます。

このとき気付かされたのは、学校教育に比べ、未就学児や放課後の児童への支援が大きく遅れている現実でした。当時、現場のスタッフたちは「御用聞きプロジェクト」と称して保育園、幼稚園を訪ね、不足している食器や玩具、家具、布団など物資の提供や、泥にまみれた園舎の清掃などの支援を実施しました。こうした取り組みが2年目のハイライトとなる、地元のみなさまのニーズに根ざした園舎などの再建プロジェクトにつながっていったのです。

今、みなさまのご支援で再建された保育園、幼稚園、そして図書館や学童保育施設では、子どもたちがのびのびと日々の生活を送っている姿が見られるようになりました。地元の材木で造られた、明るく温かい建物の中ではしゃぎまわる子どもたちは、被災地の方々や私たちに前へ進む勇気と力を与えてくれています。

復興の努力は、国や自治体の様々な取り組みによって本格化しています。その最前線では、市民団体などの地元の方々为主な担い手となって既に久しくなっています。私どもは、これまで以上に自治体、住民の方々、そして各県のユニセフ協会（協定地域組織）と一緒に、子どもたちの心のケア、虐待などからの保護、そして子ども参加による復興計画づくりをサポートしてまいります。

これまでの活動を支えてくださった国内外のみなさまに心より感謝を申し上げますとともに、被災地のこれからの復興を担う子どもたちを引き続きあたたかい目で見守ってくださいますようお願い申し上げます。

平成25年3月

公益財団法人 日本ユニセフ協会 会長

赤松良子



【表紙写真】  
海外のお友だちから届いた手紙を喜ぶ子どもたち（福島県三宝保育園）

※本文中にクレジット記載のある写真以外はすべて ©日本ユニセフ協会

## Contents

支援活動の目的と取り組み	1	子どもの保護	11
震災から2年	2	子どもにやさしい復興計画	13
2年間の支援活動状況／		広報・アドボカシー／	
支援活動実施地域および被災状況 .....	2	被災地から／支援の現場から	14
募金活動状況 .....	3	2年間収支報告	16
2年間の活動ハイライトと今後の活動予定	4	支えてくださったみなさま	17
教育	6	協力企業・団体 .....	17
保健・栄養	9	支援物資一覧 .....	17
心理社会的ケア	10		

# 子どもにやさしい復興をめざして

「あらゆる自然災害で、もっとも困難な状況におかれてしまうのは子どもたち」というユニセフの緊急時対応指針に則り、震災発生直後から、日本ユニセフ協会は、ユニセフ本部や協力企業・団体などの協力を得て緊急・復興支援活動を続けています。

活動2年目は、保育園や幼稚園などの施設再建・建設支援が本格化した一方で、子どもたちの心のケアや保護の分野で

も、子どもに関わる方々に対し、専門的な知識や情報を提供する支援などを行い、地域の中に子どもたちをサポートする仕組みを作る活動を広げました。また、子どもたちが震災を振り返りながら、自分たちの町の未来を考え、発信する場やプロセス作りの支援も継続しました。

## 緊急・復興支援における6つの取り組み



2012年は、上記3～6の取り組みを中心に活動しました

※アドボカシーとは、各目的のためのパートナー団体との連携、調整、情報共有、また意識啓発や自治体への政策提言等の活動です。

2年間の支援活動状況 ※金額は、今後の実施予定分を含む

緊急支援物資の提供

P.4

支援総額: 187,309,517円

水、下着、子ども用衣類等

※詳しくはP.17の「支援物資一覧」をご参照ください。

保健・栄養

P.9

支援総額: 962,942,456円

- 乳幼児健診を再開できた自治体の数  
18市町 [岩手: 4市町、宮城: 14市町]
- 健診を受けることができるようになった子どもの数  
約27,000名 [岩手: 4,000名、宮城: 23,000名]
- インフルエンザ予防接種の助成を受けることができる子どもの数  
約140,000名 (2011~2012年)  
最大160,000名 (2012~2013年)
- 食器支援・給食センター修繕支援により、給食を食べられるようになった子どもの数  
15,216名 [宮城]
- 保育園・幼稚園での補食(おやつ)支援を受けた子どもの数  
約830名 [岩手: 25施設]

教育

P.6~

支援総額: 2,615,312,658円

「バック・トゥ・スクール(学校へ戻る)」キャンペーン

- 学校の再開にあわせて、文房具セットの支援を受けた子どもの数 26,376名

[岩手: 17,540名、宮城: 6,906名、福島: 1,930名]

- 学用品や設備支援を受けた生徒総数/学校数  
33,276名/638校

[岩手: 10,380名、宮城: 21,621名、福島: 1,275名]

[岩手: 48校、宮城: 488校、福島: 102校]

「バック・トゥ・保育園、幼稚園」キャンペーン

- 備品や設備支援を受けた園児の数/園舎数  
4,284名/73施設

[岩手: 1,976名、宮城: 2,214名、福島: 94名]

[岩手: 38施設、宮城: 34施設、福島: 1園]

保育園・幼稚園再建支援プロジェクト

- 保育園・幼稚園に戻ることができた子どもの数/園舎再建支援を受けた園舎数  
994名\*/14園

[岩手: 216名、宮城: 673名、福島: 105名]

[岩手: 4園、宮城: 9園、福島: 1園]

※2013年2月末時点の園児数

支援活動実施地域および被災状況

岩手県

【震災前データ】

- 0~15歳の子どもの数: 36,103名\*1  
そのうち0~6歳が13,217名
- 6歳未満の子どもをもつお母さんの数: 7,431名\*1  
注) 岩手県沿岸部12市町村

【震災後データ】

- 震災による死者: 4,976名\*2
- 行方不明者: 1,205名\*2
- 0~19歳までの死者: 164名\*3
- 遺児および孤児の数: 遺児482名、孤児94名\*4

【支援活動実施地域】

1 盛岡市 2 奥州市 3 一関市 4 花巻市 5 北上市 6 宮古市  
7 滝沢村 8 大船渡市 9 釜石市 10 久慈市 11 紫波町  
12 二戸市 13 遠野市 14 八幡平市 15 矢巾町 16 陸前高田市  
17 山田町 18 雫石町 19 洋野町 20 大槌町 21 岩泉町  
22 西和賀町 23 住田町 24 野田村 25 田野畑村 26 普代村

宮城県

【震災前データ】

- 0~15歳の子どもの数: 141,059名\*1  
そのうち0~6歳が57,936名
- 6歳未満の子どもをもつお母さんの数: 35,770名\*1  
注) 宮城県沿岸部16区市町

【震災後データ】

- 震災による死者: 10,365名\*2
- 行方不明者: 1,394名\*2
- 0~19歳までの死者: 617名\*3
- 遺児および孤児の数: 遺児902名、孤児135名\*4

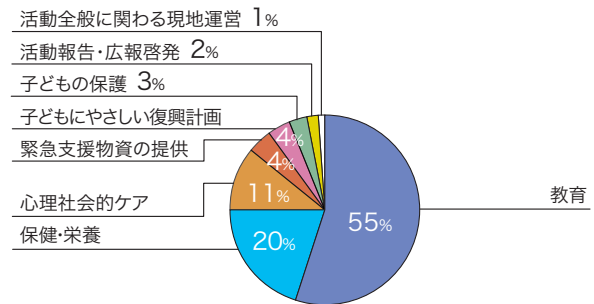
【支援活動実施地域】

1 仙台市 2 石巻市 3 大崎市 4 登米市 5 栗原市 6 気仙沼市  
7 名取市 8 多賀城市 9 塩竈市 10 富谷町 11 岩沼市  
12 東松島市 13 柴田町 14 白石市 15 亶理町 16 利府町  
17 角田市 18 加美町 19 美里町 20 大和町 21 大河原町  
22 七ヶ浜町 23 涌谷町 24 南三陸町 25 山元町 26 丸森町  
27 松島町 28 蔵王町 29 村田町 30 女川町 31 川崎町  
32 大郷町 33 色麻町 34 大衡村 35 七ヶ宿町

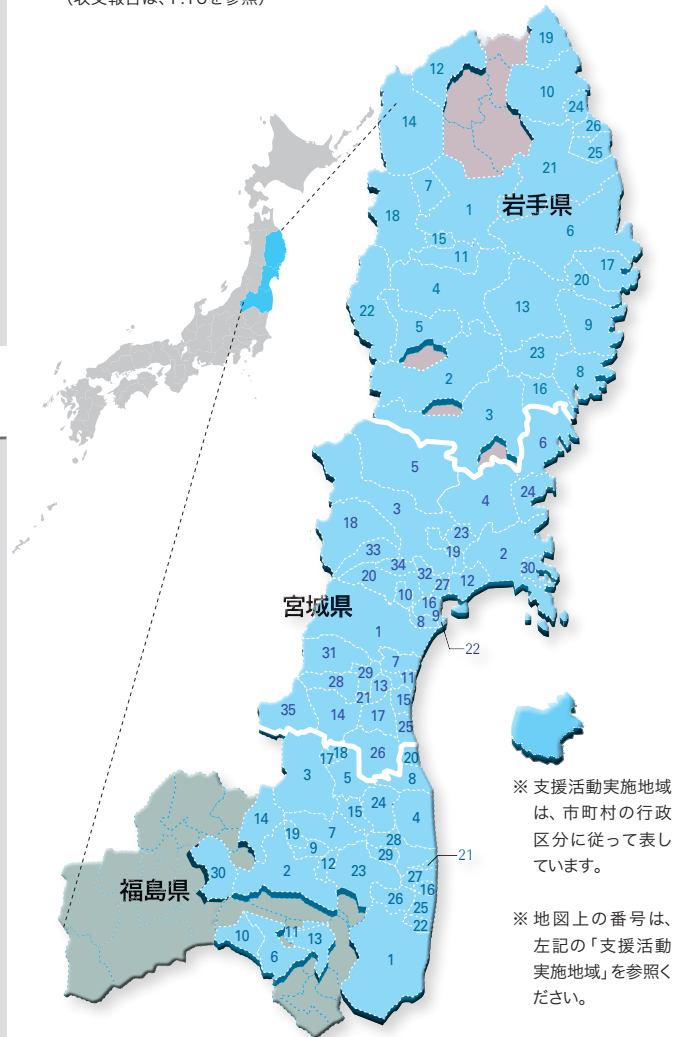
## 募金活動状況 (2012年12月31日現在)

日本ユニセフ協会に寄せられた東日本大震災緊急募金  
 国内から 3,393,860,571円  
 海外から 1,212,946,130円

### 活動分野別 募金用途(割合)



※ 募金用途の割合は、支出予定額を含む全体額から算出  
 (収支報告は、P.16を参照)



\*1. 平成22年度国勢調査より

\*2. 消防庁「平成23年(2011年)東北地方太平洋沖地震(東日本大震災)(第146報)」2012年9月28日発表

\*3. 警察庁「東北地方太平洋沖地震による死者の死因等について(3/11～9/11)」平成23年9月15日 広報資料より

\*4. 岩手県児童家庭課、宮城県子育て支援課、福島県児童家庭課より(2013年1月時点)

### 心理社会的ケア

P.10～

支援総額: 511,700,206円

- プレイセラピー／心のケア研修参加者数 **2,200名** [岩手: 770名、宮城: 1,380名、福島: 50名]
- 福島県臨床心理士会の心のケア事業に参加した親子の数 **9,949名** (おとな5,929名、子ども4,020名)
- 「ちっちゃな図書館」プロジェクトで配布した書籍の数 **約330,000冊**
- 「こどもバス遠足」に参加した子どもの数 **4,485名** [岩手]
- 「おもいっきり!そとあそび」に参加した子どもの数 **47,583名** [福島]
- 「福島の子ども保護プロジェクト」に参加した親子の数※ **3,476名** ※未就学児プランの提供および費用の一部を負担

### 子どもの保護

P.11～

支援総額: 123,701,892円

- CAP(子どもへの暴力防止)スペシャリスト認定者数 **115名**
- CAP(子どもへの暴力防止)ワークショップ参加者数 **7,069名** (おとな3,862名、子ども3,207名)
- お父さん支援員研修修了者数 **315名** [岩手: 208名、宮城: 107名]

### 子どもにやさしい復興計画

P.13

支援総額: 166,154,402円

- 参加または活動対象となった地域の子どもの数 **22,878名** [岩手県大槌町、宮城県石巻市、宮城県仙台市、福島県相馬市]

## 福島県

### 【震災前データ】

- 0～15歳の子どもの数: 77,906名\*1  
 そのうち0～6歳が30,901名
- 6歳未満の子どもをもつお母さんの数: 18,144名\*1  
 注) 福島県沿岸部10市町

### 【震災後データ】

- 震災による死者: 2,686名\*2
- 行方不明者: 226名\*2
- 0～19歳までの死者: 98名\*3
- 遺児および孤児の数: 遺児151名、孤児24名\*4

### 【支援活動実施地域】

- |        |        |        |         |          |
|--------|--------|--------|---------|----------|
| 1 いわき市 | 2 郡山市  | 3 福島市  | 4 南相馬市  | 5 伊達市    |
| 6 白河市  | 7 二本松市 | 8 相馬市  | 9 本宮市   | 10 西郷村   |
| 11 矢吹町 | 12 三春町 | 13 石川町 | 14 猪苗代町 | 15 川俣町   |
| 16 富岡町 | 17 桑折町 | 18 国見町 | 19 大玉村  | 20 新地町   |
| 21 双葉町 | 22 広野町 | 23 田村市 | 24 飯館村  | 25 楡葉町   |
| 26 川内村 | 27 大熊町 | 28 浪江町 | 29 葛尾村  | 30 会津若松市 |

## 2年間の活動ハイライトと今後の活動予定

### 震災発生から1ヵ月 緊急支援物資の提供と 母子への保健衛生、 栄養支援

#### 主な支援活動状況

- 飲料水、子ども用衣料、衛生用品、靴などの支援物資の調達・配布
- 母乳育児を含めた母子保健事業の支援
- 「子どもにやさしい空間」の設置やプレイセラピー／心のケア研修などを通じた心理社会的ケアを開始
- 国際的スタンダードに基づく震災孤児に対する代替的養護を訴えるアドボカシー



### 震災発生から2ヵ月 学校・保育園・幼稚園の 再開と心のケア 支援の拡大

- 「バック・トゥ・スクール（学校へ戻ろう）」キャンペーンフェーズIの実施
  - ① ランドセルや文房具などの学用品を提供
  - ② 小中学校に机、椅子、コンピュータなどの機器、備品、仮設トイレなどを提供
- 学校・保育園・幼稚園での給食やおやつなどの栄養補給支援
- 保育園や幼稚園、学童保育施設に知育玩具や机、椅子、食器などを提供
- 心理社会的ケア
  - ① 「ちっちゃな図書館」プロジェクト：全国から寄贈された児童書をセットにして、保育園・幼稚園、個人宅などに送付
  - ② 「こどもバス遠足」：子どもたちに外遊びや様々な体験を思い切り楽しむ機会を提供するバス遠足を開始
  - ③ プレイセラピー／心のケア研修、臨床心理士による支援の拡大展開



### 震災発生から 3ヵ月～6ヵ月

### 子どもたちへの 基本的な行政サービス 再開の支援

- 「バック・トゥ・スクール（学校へ戻ろう）」キャンペーンフェーズIIの実施
  - 小中学生に、体操着、習字道具、絵の具、副教材などの学用品の購入支援
- 中学・高等学校総合体育大会開催支援
- 学校健診用資材の提供
- 乳幼児健診、予防接種など母子保健事業の本格的再開への支援
- 保育園、幼稚園等児童福祉施設再建支援
- 仮設住宅などへの「子育て支援センター」機能の併設支援・アドボカシー
- 虐待・DVなどの暴力防止キャンペーン



©日本ユニセフ協会/2011/K.Goto

©日本ユニセフ協会/2011/K.Goto

震災発生から  
6か月～12か月  
中長期的な復興支援へ

- 産婦人科医師派遣、歯科検診実施、仮設保健センター建設、インフルエンザ予防接種費用助成など、保健分野での支援
- 保育士派遣支援
- 保育園、幼稚園等児童福祉施設再建支援：仮設建物から恒久建築物建設中心の支援に
- 心理社会的ケア
  - ① プレイセラピー／心のケア研修、② 臨床心理士派遣、③ Tegami Project、④ 祈りのツリー project
- 子どもの保護
  - ① 子どもへの暴力防止研修、② 虐待・DVなどの暴力防止キャンペーン（ラジオコマーシャル等を通じた情報提供・啓発）、③ 父子家庭＋父親支援プロジェクト
- 子どもにやさしい復興計画
  - ① 大槌町ワークショップ・公園造り、② ふるさと相馬子ども復興会議



震災発生から  
12か月～24か月  
復興の礎をつくる支援

- 保育園、幼稚園等児童福祉施設再建支援
- 心理社会的ケア
  - ① 心理士派遣および相談室建設、② 福島の子どもの保養プロジェクト、③ Tegami Project、④ 祈りのツリー project
- 子どもの保護
  - ① 子どもへの暴力防止研修、② 虐待・DVなどの暴力防止キャンペーン（ラジオコマーシャル等を通じた情報提供・啓発）、③ 父子家庭＋父親支援プロジェクト、④ 「家庭のリスクと子どもの保護」シリーズ研修、⑤ 里親子支援、⑥ 放課後子ども見守り事業、⑦ 虐待防止地域ネットワークづくり研修
- 子どもにやさしい復興計画
  - ① 子どものまち・いしのまき、② 大槌町未来の教室ワークショップ、③ ふるさと相馬子ども復興会議、④ 未来の七郷～20才になったときのまちの姿
- 福島県外避難者子育て支援
- 保育士派遣支援
- インフルエンザ予防接種費用助成支援



今後の活動予定

各県ユニセフ協会（協定地域組織）や自治体、住民の方々の取り組みをサポートする支援を継続します。

具体的には、「子どもにやさしい空間」づくりとかたちでスタートさせた“子どもの心のケア”、父子家庭を中心としたひとり親世帯への支援をはじめとする子どもの社会的擁護・保護の仕組みづくり、各地で本格化し始めた復興プロセスに様々なかたちで子どもたちが参加できる仕組みづくりを、今後の支援活動の中心としていきます。



# 教育

## 保育園・幼稚園再建支援プロジェクト

岩手県・宮城県・福島県の自治体の要請を受け、保育園や幼稚園の園舎、児童福祉や保健関連施設の再建（建設）や大規模修繕支援を実施してきました。

地震や津波による被害から、多くの保育園や幼稚園で保育の再開が困難に直面し、また、土地の安全性などの問題から、これまでの場所で保育を再開できる見通しが立ちませんでした。こうした状況を受け、日本ユニセフ協会は、園舎の再建の支援を決定。2011年6月1日、岩手県の大槌保育園では、仮設園舎で約80日ぶりに保育が再開されました。

当初プレハブ建物の支援でスタートした本事業ですが、その後、恒久的に使用できる建物の建設支援も本格化。これらの恒久物件の支援にあたっては、以下の基本理念と基本方針を掲げました。

### ● 基本理念

1. 子どもの参画、子ども中心の環境づくり
2. あたたかみとぬくもりを感じる空間づくり
3. 自然、地域とのつながり

### ● 基本方針

1. 声を聞く、ともにつくる参加型の建設プロジェクト
2. 幼児の環境教育における学びの森
3. 安全安心な子育て空間
4. 地域の風土、文化との調和
5. 環境に配慮した共生型建築

すべての工事は、2013年1月までに無事終了しました。

2013年1月20日、宮城県亶理町で、本再建プロジェクトの最後となった児童福祉施設の落成式が行われました。本プロジェクトに参加する設計、施工、管理会社などで構成する設計監理共同体の委員長を務めてくださった浪川宏氏（株式会社 伊藤喜三郎建築研究所 取締役副社長）は、「恒久的な施設を造るにあたり、ユニセフらしい施設とは何か？子ども優先の建物とは何か？を考えてきました。完成したそれぞれの建物のすばらしい点は、暖房や換気機能がすばらしいということではなく、“ここにいたらうれしい”とか“ここにいることが思い出になる”建物だということです。」と述べられ、「このプロジェクトを通じて、子どもたちのための施設はこうあるべきだ、というものを示せたのではないかと、プロジェクトを振り返りました。



亶理町児童福祉施設の上棟式には、地元の人も参加し、工事が無事に進んでいることを感謝し、無事完成を祈願した



1. 大槌保育園（岩手県大槌町）  
被災した園舎から内陸に3kmほど離れた緑豊かな場所に建設



2. 吉里吉里保育園（岩手県大槌町）  
子どもたちもウッドデッキ作りに参加



3. ひまわり保育園（宮城県石巻市）  
ひまわり色の黄色い門が印象的な園舎



4. 三宝保育園（福島県いわき市）  
園庭の除染作業が進められる中、仮設園舎を建築



5. みどり幼稚園（岩手県大槌町）  
内陸の自然豊かな地域に建設された仮設園舎



6. 竹駒保育園（岩手県陸前高田市）  
37名の元気な子どもたちが入園式に出席



7. 牡鹿地区保育所（宮城県石巻市）  
赤と青のカラフルな園舎は、子どもたちに大人気



8. 井内保育所（宮城県石巻市）  
延床面積700㎡。震災後の同市で当時最大の工事となった



## Report 1 竹駒保育園 (岩手県)

2012年4月4日、雪が降りしきる中、日本ユニセフ協会の支援を受けて完成した仮設園舎に隣接するコミュニティセンターで入園式が行われました。入園したのは1歳から5歳までの37名。名前を呼ばれると、子どもたちは元気に返事をして、先生の前に集まりました。

「入園おめでとうございます。竹駒保育園は津波の被害のため、1年間休園していましたが、日本ユニセフ協会のあたたかいご支援のもと、今日の日を迎えることができました。本当にありがとうございます。また、多くの方々の励ましやご支援のあった1年でした。入園した子どもたちが元気に笑顔



名前を呼ばれ、うれしそうに先生のもとへ歩く女の子

いっぱい過ごすことが、みなさまのやさしさに応えることになると思います。みんなと一緒に遊べることを待ち望んだ1年でした」式の冒頭、村上和加恵園長は、こう祝辞を述べられました。



「毎日保育園に行きたい!と言ってもらえるような保育園を目指したい」(加藤千佳先生)

入園式の後、みんなで新しい園舎へ。壁に貼られた先生たちの手作りの切り絵、「にゅうえんおめでとう」のメッセージ、白木を基調とした明るい部屋を見て、子どもたちだけでなく、保護者の方もとてもうれしそうでした。入園した男の子のお母さんは「みんなとまた一緒に通えるからとてもうれしい。すごく心待ちにしていたんですよ」と話してくださいました。



9. あさひ幼稚園 (宮城県南三陸町)  
被災した樹齢300年の杉の木を使用



10. ふじ幼稚園 (宮城県山元町)  
「三十三間堂」をモチーフにした被災木造り



11. マザーズホーム(宮城県気仙沼市)  
複合的な福祉エリアにできた  
障害児通所支援施設



12. 牧沢きぼう保育所 (宮城県気仙沼市)  
部屋の配置には、子どもたちの交流を  
促す工夫も



13. 葦の芽幼稚園 子育て支援センター  
(宮城県気仙沼市)  
地域の子育ての拠点に



14. 亘理町児童福祉施設  
(宮城県亘理町)  
外板は被災木をリユース

	施設名	園児数※	完成
1	大槌保育園(岩手県大槌町)	77名	2011年5月
2	吉里吉里保育園(岩手県大槌町)	43名	2011年8月
3	ひまわり保育園(宮城県石巻市)	91名	2011年11月
4	三宝保育園(福島県いわき市)	105名	2011年11月
5	みどり幼稚園(岩手県大槌町)	56名	2012年1月
6	竹駒保育園(岩手県陸前高田市)	40名	2012年3月
7	牡鹿地区保育所(宮城県石巻市)	31名	2012年6月
8	井内保育所(宮城県石巻市)	81名	2012年7月
9	あさひ幼稚園(宮城県南三陸町)	51名	2012年7月
10	ふじ幼稚園(宮城県山元町)	110名	2012年8月
11	マザーズホーム(宮城県気仙沼市)	33名	2012年9月
12	牧沢きぼう保育所 (旧一景島保育所・宮城県気仙沼市)	26名	2012年9月
13	葦の芽幼稚園 子育て支援センター (宮城県気仙沼市)	179名	2012年12月
14	亘理町児童福祉施設(宮城県亘理町)	71名	2012年12月

※2013年2月末時点

## Report 2 葦の芽幼稚園 子育て支援センター（宮城県）

2013年1月19日の落成式。葦の芽幼稚園の小野寺純一園長は、「気仙沼の復興はこれから長い道のりを歩いていきますが、子どもたちにはもうこれ以上我慢を強いることなく、自分の思いを思う存分膨らませる時間と場所を提供していくことが私たち幼児保育に携わるものの役割であると考えています」「この施設がそうした役割を十分に果たし、気仙沼の未来を担う子どもたちの健やかな成長に寄与していけるよう私たちは力を尽くしていきたいと考えています」と、新しいスタートへの抱負を述べられました。



子育て支援センターの入口に「これぼくの壁!」「これが本当に壁になるの?」は子どもたち手作りの「お迎えの壁」  
とうれしそうに作業に取り組む子どもたち

### 放課後も安心して過ごせる場所を

2012年4月26日、「気仙沼小学校区留守家庭児童センター」が完成。落成式には、この施設の完成を待ち望んでいた子どもたちや保護者、関係者が出席しました。

菅原茂市長は、「津波がきて、みなさんも怖い思いをしたと思います。みなさんはそれに打ち勝って、1年間頑張ってきました。新しい気仙沼小学校の子どもたちとして、すくすく育ててもらえるとありがたいです」と述べました。設計を担当した建築家の薩田英男さんが「このあたりは杉が有名で、気仙杉といういい杉が取れます」と語ると、子どもたちからは驚きの声。「建物の天井はその杉でできていて、杉の香りがします



気仙沼小学校区留守家庭児童センター  
新しいセンターでかくれんぼや鬼ごっこをしたいと話す子どもたち



女川オレンジハウス  
平日は学童施設として、休日はお母さんたちの交流の場として活用

名取市図書館どんぐり子ども図書室  
木の香りがする図書室で、たくさん子どもたちが本に親しむ

し、天然のオイルを塗っているので、アトピーや喘息の子どもたちでも過ごしやすいです。みんなで元気に使ってくれるとうれしいです」と続けました。

このほかに宮城県女川町にトレーラーハウスを使った学童保育施設、また、宮城県名取市では、木造平屋建ての「名取市図書館どんぐり子ども図書室」の建設を支援しました。

放課後、子どもたちが友だちと一緒に楽しい時間を過ごし、また、保護者の方が安心して仕事ができる環境を作ることも復興の一歩につながります。

### 保育士派遣事業の継続

被災地では、保育士不足も深刻です。日本ユニセフ協会は、2011年10月から、公益社団法人青年海外協力協会（JOCA）と連携し、「被災地子育て支援プロジェクト」を実施しています。

JOCAは、青年海外協力隊経験者からなる「災害救援専門ボランティア」と「国内協力隊」（長期）を被災地に派遣。それぞれの専門性や協力隊時代の経験を活かし、中期的な視点に立った支援を続けています。この連携事業では、2011年11月から子どもたちの保育支援と子育て支援を中心とした活動を行う国内協力隊員（保育士）を岩手県大槌町の大槌保育園と山田町地域子育て支援センターに派遣しています。

大槌保育園には、これに先立つ2011年8月から、東京都社会福祉協議会保育部会保育士会の協力を得て保育士を派遣。応急的な保育補助支援も行いました。

津波の直接的な被害は受けなかったものの、震災に伴う職員の不足により休止状態にあった山田町地域子育てセンターには、同町の要請を受け、2名のJOCA国内協力隊員を派遣。子育て支援センターで平日開設される「ワイワイキッズ」、月1回の親子イベント「すくすく広場」のほか、地域住民の方々との絆を広げる様々な活動を行っています。

子どもたちがお友だちや保育士の先生と安心して1日を過ごす場所を確保することは、子どもたちの成長だけでなく、お母さんたちをはじめ、ご家族にとっても大切です。この連携事業は2013年3月末まで続けられる予定です。



大槌保育園で子どもをあやすJOCA国内協力隊員（写真提供：JOCA）

## 保健・栄養

### 中長期的視野に立った支援

震災直後より乳幼児健診、予防接種、保育園などの補食支援や食生活指導などの保健・栄養支援活動を行ってきました。自治体などによる保健・栄養分野の活動が少しずつ再開される一方で、大きな被害を受けた地域では、施設や物資の不足のために、震災前と同様の行政サービスの回復は遅れていました。こうした状況を受け、2012年はより中長期的視野に立った支援活動を行いました。

### 給食用の食器を支援

東日本大震災で、沿岸部が広範囲にわたり被害を受けた宮城県石巻市。同市にある6カ所の給食センターのうち、沿岸部に建っていた3カ所が地震や津波による被害で使えなくなりました。多くの方の努力によって給食が再開されましたが、震災前と同じような栄養バランスのとれた給食を提供するには、食材を確保し、調理するだけでなく、品数に対応できる食器や食器洗浄機、保管庫が必要でした。

石巻市の要請を受け、市内の全小中学生15,000名分の給食食器と、給食センター3カ所への食器洗浄機や消毒保管庫などの設備を支援しました。

「おー、おかずが2つあるー!」2012年4月、日本ユニセフ協会が提供した食器で出された1年ぶりの完全給食に、子どもたちから歓声があがりました。

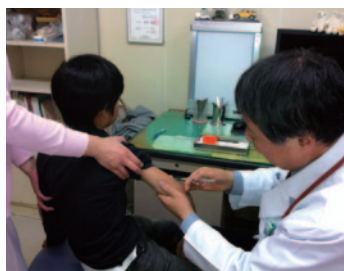


ユニセフのロゴ入り食器



女川町学校給食第一共同調理場の修繕も支援した

### インフルエンザ予防接種費用助成



2012年11月 インフルエンザ予防接種の様子(写真提供:宮城県亘理町)

震災後、子どもたちの体力と免疫の低下が想定される中、編入等で学校1校あたりの子どもの数が増えていたことや、厳しい経済状況などを背景に、2011年の冬はインフルエンザの流行が懸念されていました。このた

め、岩手、宮城、福島各県沿岸部の29の自治体の子どもたちを対象に、インフルエンザ予防接種費用の助成支援を実施しました。

医療機関から「助成があった分、接種率が上がり、重症化を抑えられた」という声が寄せられたこともあり、2012年の冬も引き続き同29自治体を対象とした支援を実施。生後6月から中学生までの約16万名を対象に、市町村の保健当局等を通じ、接種1回あたり2,000円を助成しました。

### 南三陸町保健センターの再建

宮城県南三陸町では、志津川地区と歌津地区の保健センターも津波で流失しました。それぞれ、小学校の空き教室などを借りて乳幼児健診などを再開していましたが、母子の健康を守る重要な場として、住民から保健センターの早期再建が望まれていました。2011年11月、南三陸町の要請を受け、この2つの保健センターの再建を支援することを決定。2012年4月、両地区の施設の建設が完了し、落成式が行われました。



南三陸町志津川保健センター



南三陸町歌津保健センター

### 行政や大学との連携

岩手県山田町と青森県立保健大学と協力し、子育てと子どもたちの食生活支援のためのプロジェクトを実施しました。2011年6月上旬から11月末まで管理栄養士を山田町に派遣し、保育園、避難所や仮設住宅を訪問。補食支援活動の実施と調整、子どもの食生活のモニタリング、保護者への栄養指導などの支援を行いました。



プロジェクトの締めくくりを実施した「山田町おやこクッキングカフェ」

また、震災前と後の食生活に関するアンケートを実施し、「子どもたちの食生活通信」を保育園などを通じて保護者に配布。その結果を分析し、未就学児のいる保護者や行政にアドバイスを行ってきました。

# 心理社会的ケア

## 心理社会的ケアとは

未曾有の大災害を目の当たりにし、影響を受けた子どもたちは、大切なものを失ったショックや急激な生活環境の変化などから、少なからず心に不安を抱えています。表面上は問題なく日常生活を送っていても、地震に対し過敏に反応したり、大きな物音に怯えたりするなどの反応を見せる子どもは、震災から2年が経過した今日でも多く報告されています。そうした子どもたちが心の傷やつらい体験を乗り越えようとする過程においては、身近なおとなが寄り添い、長期的に適切なケアをすることが大切です。

日本ユニセフ協会の心理社会的ケアは、保護者、保育士、幼稚園教諭、子ども支援・子育て支援関係者、行政職員など、子どもと接する機会が多い方々に対し、心の回復に効果的な子どもとの関わり方、遊び方に関する知識や技術を伝え、日常生活や保育の現場などで被災した子どもたちの心を支えていける体制を被災地に作っていくことを目指して展開しています。研修会の開催や、日本ユニセフ協会の心理社会的ケアアドバイザーが定期的に被災地の行政や保育施設などを訪問して、直接相談を受ける活動を続けています。

福島県では、福島県臨床心理士会と連携して、健診などの親子が集う場所や子どもの保養プロジェクトに臨床心理士を派遣し、保護者や子どもたちの心のケアにあたっています。

また、県内外に避難している家庭に対するサポートも求められています。お母さんと子どもたちが他の家族と離れて暮らし、地域社会とのつながりを持ちにくいまま、子育てや暮らし、将来の不安を抱えていることが多いという特有の問題があることが指摘されています。

山形県にも1万名以上が避難。やまがた育児サークルランドと連携し、子どもとお母さんたちが集える場所や、人とのつながりをつくる機会を提供するなどして、様々なかたちで福島から避難している母子を支えています。

## 日本プレイセラピー協会との連携

発達途上にある子どもたちにとって最も自然な表現方法は、感じたことや体験したことを遊びの中で表現することです。日本プレイセラピー協会と連携して行っている「遊びを通した子どもの心のケア」や「親子遊び」の講習会では、臨床心理士の専門的な観点から、大変な体験をした子どもたちに見られる反応や、子どもたちがつらい体験を乗り越える手助けとなる遊びの方法を保護者や先生に指導しています。

また、震災で家族を亡くした子どもへの接し方や、安心感を取り戻すのに役立つ遊びなども紹介しています。2011年

3月末から始まったこのプロジェクトには、2012年12月までにのべ2,200名が参加しました。

これらの研修や講習会の内容をまとめた『遊びを通した子どもの心の安心サポート～つらい体験後の未就学児（乳幼児）のためのマニュアル～』を2012年3月に発行。講習会での利用に加え、すでに研修を行った保育園や幼稚園、団体や自治体にも配布され、被災地での支援活動の場で役立てられています。

また、2012年には、宮古児童相談所の心理士を対象としたより専門的なプレイセラピースキルの研修や、陸前高田市の児童家庭相談員・子育て支援スタッフを対象とした親子と関わるスキルの研修を月1回ペースで実施。地元の専門家のスキルの向上をサポートしています。



釜石市内で開かれた研修に参加する幼稚園や保育園の先生方



『遊びを通した子どもの心の安心サポート～つらい体験後の未就学児（乳幼児）のためのマニュアル～』

## 気仙・子どものこころのケアセンター相談室

岩手県大船渡市は、児童家庭支援センター大洋に「気仙・子どものこころのケアセンター」を2011年7月に設置。震災後、センターでの相談業務に加え、避難所等も巡回しながら、被災した子どもたちや家庭の支援を行ってきました。しかし、職員の方々も被災され、また心のケアを必要とする子どもたちが増えたことから、職員の方々の負担を減らし、地域での活動を充実させるために、全国児童家庭支援センター協議会と連携し、2011年10月から2012年3月まで、全国の児童家庭支援センターから計9名の心理士の方々を派遣しました。

また、相談件数が増える中、子どもや家族のプライバシーを確保できる相談室の整備も急務となっていました。

日本ユニセフ協会は、岩手県の要請を受け、2012年10月に仮設相談室を開設。小児科医や児童精神科医との面談



気仙・子どものこころのケアセンター相談室  
個室なので安心して相談できる環境に

や、児童家庭支援センター心理士との相談スペースとしても利用されています。また、児童家庭支援センターへの来所は、学校への出席日と同等に認められるため、不登校の子どもたちにも利用されています。

### 福島の子ども保養プロジェクト

原発事故の後、健康被害への不安から、福島県の子どもたちは、以前のように思い切り外で遊ぶことができなくなりました。あれから2年、多くの家庭は、今も同じ不安を抱えたままです。

福島県ユニセフ協会は、福島県生協連、福島大学災害復興研究所とともに、子どもの健康被害の不安を抱えながら暮らす保護者のニーズを把握し、支援することを目的として、「福島の子ども保養プロジェクト」を主催。日本ユニセフ協会は本プロジェクトへの支援を通じて、週末や長期の休み期間



「福島では外で遊べないので、外で思い切り遊べて楽しかった」という声が寄せられた

中、子どもたちに低線量の地域で過ごす時間を提供しています。野外活動が可能な地域でのびのびと遊び、乳幼児も含めて親子でくつろぐことは、心のケアにもつながります。

### Tegami Project

震災後、世界各地から届いた励ましの手紙は「Tegami Project」を通じて1,700名以上の東北の子どもたちに手渡され、34の国と地域の子どもたちとの間に新しい絆を築きました。2012年7月にはビデオチャットで、アフガニスタンと福島の高校生たちが再会。子どもの立場から見た紛争や災害、復興への課題や未来への希望について意見が交わされました。



### 祈りのツリー project

2012年も実施した「祈りのツリー project」。プロのクリエイターや美大生など1,200名が製作したオーナメントが、被災地を彩りました。クリスマス直前には、約100名のボランティアが被災地を訪れ、ワークショップを実施。子どもたちに笑顔を届けました。



## 子どもの保護

### 子どもの保護とは

東日本大震災によって、被災地の子どもたちを取り巻く状況は一変しました。大切な家族や親戚、友人を失ったり、住み慣れた家や地域を離れざるを得なかったり、転校を余儀なくされた子どもたちが数多くいます。学校の校庭に仮設住宅が建つなどして、子どもの遊び場も減りました。以前のような祖父母世代や地域の人々による子育て支援が難しくなる一



南三陸町教育委員会の要請で、NPO法人キッズドアに委託し、実施している戸倉小学校/志津川小学校での放課後子ども見守り事業の様子 (写真提供: NPO法人キッズドア)

方で、子育て世代のおとなたちは、生活再建や地域復興の担い手としての役割も求められ、大きな負担を抱えています。ひとり親家庭の増加や震災遺児の養育といった新たな課題も生まれています。こうした不安やストレス

が、暴力などのかたちで家庭生活や子育てに暗い影を落とすことがないように、そして地域に根ざした子ども支援、子育て支援の体制を構築できるよう、子ども、保護者、行政、地域の人々それぞれのニーズに対応した中長期的な支援を行っています。

### 子どもへの暴力防止に向けたJ-CAPTAとの連携

社団法人J-CAPTAと連携し、子どもたちの人権を守り、暴力を予防し、本来持っている一人ひとりの生きる力の回復を、復興の中で継続して支えていくことを目的に、CAPプログラム（「子どもへの暴力防止」の略で、子どもたちが様々な暴力から自分の心と体を守るための教育プログラム）を取り入れたプロジェクトを進めています。具体的には、CAPプログラムを実践する、「暴力防止スペシャリスト」を地域で養成しながら、保育園・幼稚園、小中学校、児童福祉施設や地域の公民館などで、子どもたちや教職員、地域のおとなを対象にしたCAPワークショップを実施しています。さらに、教職員研修や要保護児童対策地域協議会など専門職向けの様々な研修会

でも、CAPワークショップが行われています。これまで、岩手県、宮城県、福島県で、115名のCAPスペシャリストが誕生し、のべ7,069名（子ども3,207名、おとな3,862名）がCAPワークショップに参加しています。



おとな向けCAPワークショップで「自由」のポーズをとる参加者

## デートDV予防パンフレット

デートDVとは、結婚前のパートナーの間で起こる暴力です。被害者も加害者もそれが暴力だと認識できず、問題が長引いたり、エスカレートしたりするケースもあります。日本ユニセフ協会は、岩手県陸前高田市の要請を受け、親密なパートナーシップを形成し始める10代の子どもたちを対象にしたデート



陸前高田市とともに作成したデートDV予防パンフレット

DVに関するパンフレットを作成しました。パンフレットは、自他を尊重する関係性とはどのようなものか、一人ひとりが持つ安全・安心の権利を侵害する暴力にはどのような行為が含まれるのか、暴力を受けた場合にどのような行動を取り、安全を取り戻せばいいのかなどの知識を、漫画などを使ってわかりやすく伝えています。震災の影響を受け、居場所を失ったり将来への不安を抱える10代の子どもたちがデートDVに巻き込まれないよう、子どもたちに配布されたり学校現場で活用される予定です。

## 父子家庭+父親支援プロジェクト

被災父子家庭や復興ストレスを抱える被災県のお父さんたちへの支援を通して、養育放棄、子どもを巻き込むDV、児童虐待などの予防を目指しています。

2011年10月、NPO法人新座子育てネットワークに委託して始まった「父子家庭+父親支援プロジェクト」では、被災地の保育士、保健師、学童指導員、自治体職員、民生委員など子ども支援に従事する方々を対象に、父子家庭・父親支援に関する支援技術・知識・情報・思考力を身につける「お父さん支援員」研修を実施しました。宮城県仙台市と石巻市に続き、2012年は、岩手県児童家庭課や沿岸振興局、沿岸6市町などの協力を得て5月から8月の間に開催した計10回の研修会には208名が参加。また、県内33ヵ所に地域の支援拠点としての「パスターション」が設置されました。お父さ

ん支援員になられたみなさんは、お父さんたちへの情報提供のほか、ネットワークづくりの場として夕涼み会など父子で参加できるイベント開催、遺児家庭支援専門員などの協力を得ながら、父子家庭の方々を対象にした支援活動を続けています。2013年1月には岩手県内3市町でのフォローアップ研修会も行われました。

## 里親子支援

東日本大震災で孤児となった子どもたちの多くは、家庭養育を最優先に、親族里親に養育されていますが、高齢の祖父母による養育など、支援を必要とする困難な状況も多々あります。全国児童家庭支援センター協議会、児童家庭支援センター大洋、里親支援専門相談員を配置する児童養護施設大洋学園（大船渡市）と連携して、気仙地区の里親子支援のプロジェクトを2012年9月から実施しています。10、11月に陸前高田市および大船渡市で研修会を行ったほか、12月には、盛岡市で「里親・ファミリーホーム」に関するシンポジウムも開催されました。2013年以降は、岩手県里親会と連携し、里親だけでなく、里子の子どもたちへの支援も積極的に行っていく予定です。

## 「家庭のリスクと子どもの保護」シリーズ研修

「子ども支援者のためのシリーズ研修：家庭のリスクと子どもの保護」※を沿岸6市町で県や自治体の協力を得ながら、2012年5月から2013年1月にかけて実施しました。これは、東日本大震災の被災地域における子どもの保護を優先的に考え、子どもたちの人権を守り、暴力を予防し、本来子どもたちが持つ一人ひとりの生きる力の回復を復興の中で継続して支えていくことを目的としています。

研修では、「お父さん支援員のための研修」、「CAPワークショップを通じて子どもたちを暴力から守る」、「遊びを通した子どもの心のケア」などの連携団体による既存の研修に加え、「地域におけるリスク家庭の現状とその対応方法」、「里親支援」、「虐待防止ネットワーク作り：要保護児童対策地域協議会の可能性」など各地で全4～5回の講座が行われました。研修による知識や情報の伝達のみならず、地域で子ども支援に取り組む方々のネットワーク作りにも寄与しました。

※岩手県大槌町・釜石市では、沿岸広域振興局主催の「被災遺児家庭支援者育成研修」として実施



多くの有益な意見が出た「家庭のリスクと子どもの保護」シリーズ研修におけるグループ演習

# 子どもにやさしい復興計画

## 震災復興に向けたまちづくりに、子どもたちの声を

被災地の復興に向けたプロセスに子どもたちが参画し、子どもたち自身の声を取り入れられた「子どもにやさしい復興」が実現されるよう、専門家と連携しながら技術的支援とアドボカシーを行っています。

その一環として実施する「子どもと築く復興まちづくりプログラム」では、各自治体が復興計画のひとつとして進めている街づくりに、子どもたちのアイデアを反映させるための支援を行ってきました。被災地の復旧・復興のプロセスに子どもたちも参加できる機会をつくり、楽しく安心して生活できる町になるよう、岩手県大槌町、宮城県石巻市・仙台市、福島県相馬市の取り組みを支援しています。

社会の中で弱い立場におかれる子どもたちにとってやさしいまちは、すべての人にとってやさしく、暮らしやすいまちです。そんなまちづくりの過程で、子どもたちは震災と向き合い、意見を交わし合いながら課題を明らかにするとともに、自分たちのまちの未来について考えを深めています。

## 岩手県大槌町：「未来の教室」ワークショップ

2012年10月から11月にかけて、ひとつの仮設校舎でともに学ぶ大槌町内の4校の小学5年生約90名が参加する「未来の教室」ワークショップが行われ、子どもたちが考える理想の教室や学校施設の模型を製作しました。この4校は、2013年4月に「大槌小学校」として統合されることが決まっています。

3回にわたって行われたワークショップでは、専門家の指導のもと、子どもたちは楽しみながら模型を製作。子どもたちならではの自由な発想と同時に、避難所や仮設住宅、仮設校舎での生活経験から生まれたアイデアも見受けられました。

大槌の子どもたちの希望が、実際の教室や学校施設、そして新しいまちづくりにつながっていくことを期待し、今後も支援を続けていく予定です。



「こんな環境で勉強したい。こんな所で読書をしたり、遊んだりしたい」子どもたちが考える「未来の教室」

## 宮城県石巻市： 社会の仕組みを学ぶ実体験型まちづくり

2012年10月、石巻市内の商店街で「子どものまち・いしのみまき」が開催されました。これは、子どもたちが公共機関やお店などで働き、お金を稼ぎ、遊んだり買い物したりする、実体験型のまちづくり学習プログラムです。

当日は、当初の予想の10倍以上の2,000名近くの子どもたちが参加。地元の商業地区で開催することで、子どもたちがまちの社会的な仕組みを知り、まちづくりの楽しさを体験すること、ふるさと文化、産業、伝統などを学ぶことができました。子ども同士の新たなつながりを生み出し、コミュニティを育てていくことが期待されるこのイベントは、2013年も開催される予定です。



子どもたちでにぎわう石巻市の商店街

## 福島県相馬市：ふるさと相馬子ども復興会議

2011年11月の「相馬の子どもが考える東日本大震災」発表会に続き、2012年11月、福島県相馬市で「ふるさと相馬子ども復興会議」全体発表会が開催されました。相馬市内の小学校10校、中学校5校の代表者が3名のチームとなり、各校でまとめられた内容を映像資料を用いて発表。身をもって経験した生と死や生活の大きな変化に対して、何を思い、考えるのかをありのままに表現した時から1年が経ち、一回りも二回りも大きく成長した子どもたちは、真剣な眼差しで、ふるさとである相馬市の復興の様子や今後の課題、そして未来の相馬の姿について自分たちの言葉で語りました。

子どもたちが、ふるさと相馬市について考え、発表する機会を設けることで、子どもたちが復興に向けたまちづくりにも参画できるよう、相馬市の復興計画の中でも教育分野のひとつの柱として位置づけられている教育委員会主催のこの取り組みを継続して支援しています。



「ふるさと相馬子ども復興会議」では代表者によって各校でまとめられた内容が発表された

# 広報・アドボカシー／被災地から／支援の現場から

## 広報・アドボカシー

### ユニセフ東日本大震災報告写真展

新聞・通信社25社と写真家21名から無償提供された震災記録写真と、日本ユニセフ協会の支援活動の記録で構成された写真展を2012年3月5日から約1ヵ月間、ニューヨークの国連本部で開催。国内でも、岩手、宮城、福島、茨城、千葉、埼玉、神奈川、大阪、岡山、広島、愛媛、福岡、宮崎、佐賀、熊本の各府県で開催しました。

被災地の子どもたちが撮影した写真で構成する「EYE SEE TOHOKU」も、ニューヨーク他16会場で、震災当日に生まれた子どもたちの写真で構成する「ハッピーバースデー3.11」も、国内13県で開催しました。



被災状況の写真を真剣な眼差しで見つめる方々（2012年3月5日 国連本部）

### 『岩手県保育所避難状況記録—子どもたちは、どう守られたのか—』

未曾有の大震災において、被災地の保育現場がどう対応し、子どもたちを守ったのか。より安全な保育環境づくりに寄与するため、日本ユニセフ協会は、岩手県保健福祉部児童家庭課と合同で県内の保育施設の震災対応状況を調査。当時の避難行動や日頃からの訓練・備えなどに関する情報や教訓を『岩手県保育所避難状況記録—子どもたちは、どう守られたのか—』にまとめました。



調査はアンケートと聞き取りで実施、報告書としては全40ページに及ぶ

### 国の政策への働きかけ

2011年5月26日から、国会議員会館で開催されている「東日本大震災子ども支援意見交換会」に参加。毎回多くの

国会議員が参加するこの会議で、被災地の状況や、ユニセフ協会の取り組みを報告。被災地の自治体関係の方々の会議への参加についても、旅費等のサポートを続けています。

## 被災地から

### 【岩手】

#### 子どもたちの笑顔をたやさぬように

岩手県ユニセフ協会 事務局長 藤原綾子

岩手県ユニセフ協会は、2011年8月「いわてユニセフ10周年事業」に大槌町のキッズコーラス“あぐどまめ”を招待し、盛岡市キャラホール少年少女合唱団との交流を支援しました。“あぐどまめ”は2012年2月の定期公演にも元気にステージに立ち、歌の力のすばらしさに感動させられました。

また、被災地10ヵ所で子ども映画の上映、保育園・幼稚園での球根植え、福島の子どもの岩手山焼走りへの招待（3泊4日）、学生ボランティアの子どもたちへの寄り添いなど、多くの団体と共同して進めることができました。

これからも岩手でできることを、ボランティアのみなさんと一緒に進めていきたいと思っています。



大槌保育園の園児たちと一緒にチューリップの球根植え

### 【宮城】

#### 遠い道のりを子どもたちに寄り添って

宮城県ユニセフ協会 事務局長 五十嵐栄子

宮城県は東日本大震災で、東部の沿岸地域のほとんどが津波の被害を受け、死者・行方不明者は1万名を超えています。復興に向け前進はしているものの、遠い道のりです。

日本ユニセフ協会は6つの取り組みを進めていますが、宮城県ではそのすべてを実施しています。2012年は「保育園・幼稚園再建支援プロジェクト」がすべて終了し、園児たちは新しい園舎で元気に遊びまわっています。私たちは地元の宮城県ユニセフ協会として、地鎮祭・上棟式・落成式のほとん



どに出席しました。アグネス・チャン日本ユニセフ協会大使も参加され、園児たちへ絵本の読み聞かせをしていただきました。今後は、CAP（子どもへの暴力防止）研修を「CAPみやぎ」と連携して、小中学校などで継続していく予定です。



気仙沼市のマザーズホーム落成式では子どもたちからダンスのプレゼント

## 【福島】 子どもたちと親のストレス軽減を目指して

福島県ユニセフ協会 事務局長 佐藤一夫

全国のユニセフ協会、生協などから支援をいただいている「福島の子どもの養育プロジェクト」。このプロジェクトは未就学児、乳幼児を抱えた保護者の精神的ストレスが非常に大きいという点に着目して企画されました。

しかし、養育を必要とする対象地区の約13万名の子どもの生活環境が好転する兆しは、まだ見えていません。養育を受けている子どもは7%、週末保養に至っては3%しかいません。また、週末保養への応募総数が7,310組だったのに対し、実際保養が受けられたのは1,024組のみでした。

2013年度は実施企画の反省点や参加者アンケートを踏まえ、課題を明確にし、各関係団体へ継続的な支援をお願いしていく予定です。



週末保養ではミニ運動会を開催。子どももおとなもパン食い競走に興じた

## 支援の現場から

### 日本でも活かされた、ユニセフのノウハウ

元 日本ユニセフ協会東日本大震災緊急支援本部 岩手フィールドマネージャー  
現 ピッツバーグ大学教育学部博士課程在学中  
近藤智春

私が岩手県の被災地に入ったのは、震災から約1ヵ月後の4月中旬。最初に保育再開のお手伝いをしたのは大槌保育園

の仮設園舎建設でした。

地域の開発や復興の担い手となるのは自治体ですが、壊滅的な打撃を受け、支援団体を受け入れる余裕もないという自治体が多くありました。そこで現場に今何が必要で、自治体はどこまで対応できるかなどを把握し、マッチングさせていくという作業を繰り返し、自治体と地域のニーズのコーディネーション役に徹しました。これはユニセフの現場での経験から学んだことでした。

被災した子どもたちへの心理社会的ケアという枠組みの中では、子どもが安心して遊べる「子どもにやさしい空間」を作ったり、「こどもバス遠足」として瓦礫ばかりのまちから離れ、自然の中で遊べる機会を作ったりしました。これら一つ一つが被災地の子どもたちの、震災で失われた日常を取り戻し、精神的・社会的な回復につながっているのです。これらもまた、ユニセフの支援モデルをもとに実施したものです。

海外であれ日本であれ、子どもの権利に則って、子どもたちが健全に安全に成長していける環境を保障していくというユニセフの基本的な理念は同じであることを、東日本での活動を通じて強く感じました。

※近藤智春氏には『岩手県保育所避難状況記録—子どもたちは、どう守られたのか—』制作にご協力いただきました



ユニセフが開発途上国の現場でも使用している、子どもたちの心をケアするためのレクリエーションキットが支援活動でも活躍しました

## ユニセフから応援派遣された 日本人スタッフ

開発途上国で活動しているユニセフの日本人専門家12名が、東日本大震災の緊急・復興支援活動を応援するために、世界中から駆けつけました。

泉紀子(ナイジェリア事務所)、井本直歩子(ハイチ事務所)、大澤祐子(イエメン事務所)、籠嶋真理子(ホンジュラス事務所)、加藤正寛(アフガニスタン事務所)、國井修(ソマリア事務所)、小林葉子(スリランカ事務所)、竹友有二(アフガニスタン事務所)、野田真紀(カンボジア事務所→イラク事務所)、福原美穂(ニューヨーク本部)、水野谷優(ケニア事務所)、安田直史(ベトナム事務所) 以上12名、50音順

※2011年3月より半年以内に活動、所属は当時のもの

# 東日本大震災緊急支援活動 2年間収支報告

【収入】 2011年3月14日～2012年12月31日 (単位:円)

	金額
日本ユニセフ協会 国内事業費より	100,000,000
日本国内で寄せられた募金※1	3,393,860,571
海外のユニセフ協会を通じて寄せられた募金※2	1,212,946,130
<b>合計</b>	<b>4,706,806,701</b>

※1 海外の個人・企業・団体等から直接送金された募金を含みます。  
 ※2 ユニセフ協会(ユニセフ国内委員会)は、世界36の先進国・地域に設置されており、各国内で民間からのユニセフ募金の窓口となっています。2011年3月以降、東日本大震災に対し、16のユニセフ協会(オーストラリア、オーストリア、カナダ、チェコ、フランス、ドイツ、ギリシャ、香港、ハンガリー、アイスランド、イスラエル、韓国、ルクセンブルク、スイス、英国、米国)を通じて募金が寄せられました。

【支出】 2011年3月14日～2012年12月31日 (単位:円)

項目/内容	支出済額 (~2012年12月)	支出確定額※9 (~2013年12月)	支出予定額※10 (~2012年12月)	支出予定額※10 (2014年1月~)	合計
<b>A.緊急支援活動費</b>					
<b>1.緊急支援物資の提供</b>	<b>物資調達支援</b>	180,300,028	0	0	<b>180,300,028</b>
活動報告P.4~	技術支援※3	7,009,489	0	0	<b>7,009,489</b>
	<b>小計</b>	<b>187,309,517</b>	<b>0</b>	<b>0</b>	<b>187,309,517</b>
<b>2.保健・栄養</b>	<b>健診再開・物資調達支援</b>	53,724,008	0	0	<b>53,724,008</b>
活動報告P.9	栄養支援プロジェクト	26,942,676	0	0	<b>26,942,676</b>
	母子保健(母乳育児促進、妊婦支援、ワクチン、施設整備等)	483,571,405	176,913,000	0	<b>660,484,405</b>
	教育施設における給食、補食支援	128,695,355	0	0	<b>128,695,355</b>
	技術支援※3	93,096,012	0	0	<b>93,096,012</b>
	<b>小計</b>	<b>786,029,456</b>	<b>176,913,000</b>	<b>0</b>	<b>962,942,456</b>
<b>3.教育</b>	<b>バック・トゥ・スクール</b>	534,874,151	3,189,400	0	<b>538,063,551</b>
活動報告P.6~	バック・トゥ・保育園、幼稚園	100,925,563	1,403,650	0	<b>102,329,213</b>
	保育園・幼稚園等の園舎再建・修繕	1,839,804,151	1,043,700	12,075,000	<b>1,860,477,451</b>
	中高総体	67,528,498	0	0	<b>67,528,498</b>
	技術支援※3	40,499,945	1,914,000	2,500,000	<b>46,913,945</b>
	<b>小計</b>	<b>2,583,632,308</b>	<b>7,550,750</b>	<b>14,575,000</b>	<b>2,615,312,658</b>
<b>4.心理社会的ケア</b>	<b>バス遠足、そとあそび・福島の子ども保護プロジェクト</b>	126,031,933	3,100,606	30,000,000	<b>219,132,539</b>
活動報告P.10~	ちっちゃな図書館、Tegami Project・祈りのツリー-project	40,819,773	0	500,000	<b>41,319,773</b>
	物資調達支援	5,146,885	0	0	<b>5,146,885</b>
	資料等作成※4	2,196,122	0	0	<b>2,196,122</b>
	技術支援※3	120,471,371	2,929,716	40,219,800	<b>243,904,887</b>
	<b>小計</b>	<b>294,666,084</b>	<b>6,030,322</b>	<b>70,719,800</b>	<b>511,700,206</b>
<b>5.子どもの保護</b>	<b>アドボカシー※5</b>	1,434,510	0	5,000,000	<b>16,434,510</b>
活動報告P.11~	資料等作成※4	2,021,302	0	0	<b>2,021,302</b>
	技術支援※3	44,853,080	0	20,131,000	<b>105,246,080</b>
	<b>小計</b>	<b>48,308,892</b>	<b>0</b>	<b>25,131,000</b>	<b>123,701,892</b>
<b>6.子どもにやさしい復興計画</b>	<b>アドボカシー※5</b>	1,427,717	925,668	5,000,000	<b>17,353,385</b>
活動報告P.13	子どもに関連する復興(遊び場、公園整備等)	33,820,161	20,701,800	15,000,000	<b>89,521,961</b>
	技術支援※3	13,802,391	11,976,665	14,500,000	<b>59,279,056</b>
	<b>小計</b>	<b>49,050,269</b>	<b>33,604,133</b>	<b>34,500,000</b>	<b>166,154,402</b>
<b>7.活動報告・広報啓発</b>	活動報告P.14~ 報告会運営・報告資料作成※6	81,598,327	1,000,000	500,000	<b>84,098,327</b>
	<b>小計</b>	<b>81,598,327</b>	<b>1,000,000</b>	<b>500,000</b>	<b>84,098,327</b>
	<b>合計</b>	<b>4,030,594,853</b>	<b>225,098,205</b>	<b>145,425,800</b>	<b>4,651,219,458</b>
<b>B.活動全般に関わる現地運営※7</b>					
	現地事務所賃借料・通信費・交通費等	32,753,666	0	757,600	<b>34,021,266</b>
	スタッフ・ボランティア現地派遣※8	21,403,977	0	81,000	<b>21,565,977</b>
	<b>小計</b>	<b>54,157,643</b>	<b>0</b>	<b>838,600</b>	<b>55,587,243</b>
	<b>総合計</b>	<b>4,084,752,496</b>	<b>225,098,205</b>	<b>146,264,400</b>	<b>4,706,806,701</b>

※3 「技術支援」は、日本ユニセフ協会が事業の遂行にあたり協力協定を締結したパートナー団体(地方公共団体を含む)を通じて支援活動や専門家への業務委託費を含みます。具体的なパートナー団体についてはP.17をご参照ください。  
 ※4 「資料等作成」は、被災者向けの資料作成活動です。  
 ※5 「アドボカシー」とは、パートナー団体との連携、調整、情報共有(ホームページ作成、会議、報告会開催等)、また意識啓発や自治体への政策提言等の活動です。  
 ※6 「報告会運営・報告資料作成」には、報告書や印刷物の作成、写真展、ホームページの英文翻訳費、映像・写真記録費用を含みます。  
 ※7 「B.活動全般に関わる現地運営」の支出は、原則として日本ユニセフ協会が活動開始時に事業費から準備した1億円がまかなわれます。なお、6ヵ月収支報告で含まれていた緊急支援活動に直接関わる交通費等については、会計士の指導により、1年レポートより「A.緊急支援活動費」に配賦し直しました。

※8 「スタッフ・ボランティア現地派遣」の支出には、滞在費、ボランティア保険等を含みますが、給与は含みません。スタッフとは、ユニセフおよび日本ユニセフ協会の職員を指します。  
 ※9 「支出確定額」とは、すでに支援を届け、支払等事務手続きのみを残す事業、または活動内容と実施金額が確定し、進行中の事業を含みます。  
 ※10 「支出予定額」は、2013年1月末時点での見込み額であり、今後の被災地の状況や活動状況により変わることがあります。

注) 本収支報告は、活動の状況をわかりやすくお伝えするためにまとめたものです。報告期間は、2011年3月の支援活動開始時から2012年12月末までの22ヵ月分となっております。日本ユニセフ協会の会計年度と異なります。

## 支えてくださったみなさま

私どもの東日本大震災の支援活動は、多くの個人・企業・団体のみなさまのご協力なしにはなし得ないものでした。日本、そして海外の多くの方々から、多大なる募金をお寄せいただきました。心より御礼申し上げます。

物資の入手や物流が困難だった時期、物品の寄贈や、迅速な調達・物流にご協力いただいた企業・団体のみなさま、支援事業の広報やアドボカシーにプロボノでご協力いただいた企業のみなさまのお力添えに深く感謝申し上げます。

支援活動は、現在も様々な専門団体や各県のユニセフ協会、地方自治体、市民社会のみなさまとのパートナーシップを通じて実施されています。

被災地における支援活動の進捗状況については、ホームページで随時報告しております。今後とも、私どもの活動へのご理解とご支援を、心よりお願い申し上げます。

ホームページ：[www.unicef.or.jp](http://www.unicef.or.jp)

### ご支援・ご協力のまとめ (2013年1月31日現在)

#### ■協力企業・団体 (各項目50音順、法人格名略)

##### 1,000万円以上のご支援をいただいた企業・団体

イオンモール、伊藤ハム、FNSチャリティキャンペーン (フジテレビジョン、関西テレビ放送などを含むフジテレビネットワーク系列28局)、MPS17、クロスカンパニー、嵯峨野不動産、シャープ、シュガーレディ化粧品、シュガーレディ本社、スタートトゥデイ、ソニー、DANONE S.A.、ダノンジャパン、第27回日本静脈経腸栄養学会、トマス・アンド・アグネス、日医工、日本興亜損害保険、ノーブル・ジャパン、B-Rサーティワンアイスクリーム、プレナス、三井住友アセットマネジメント、三ツ星ベルト、ヤオコー、ゆうちょ銀行、ワーズアンドミュージック、ワプコジャパン

##### 募金受付面におけるご協力

アメリカン・エクスプレス・インターナショナル, Inc.、三井住友銀行

##### 支援事業の実施・運営等にご協力いただいている団体、企業等

###### 【保健・栄養】

青森県立保健大学、災害時の母と子の育児支援共同特別委員会、災害人道医療支援会HuMA、ジェネロテクノロジー、電通、日本栄養士会、日本助産師会、日本プライマリ・ケア連合学会、博報堂、HANDS、母乳育児団体連絡協議会

###### 【教育】

青年海外協力協会、電通、東京都社会福祉協議会保育部保育士会、博報堂

###### 【心理社会的ケア】

岩手県北観光、岩手県北バス、JTB法人東京、全国児童家庭支援

センター協議会、電通、日本国際児童図書評議会、日本プレイセラピー協会、福島県臨床心理士会、福島交通、福島交通観光、福島青年会議所、ファミリーマート、やまがた育児サークルランド

###### 【子どもの保護】

キッズドア、J-CAPTA、児童家庭支援センター大洋、全国社会福祉協議会、全国児童家庭支援センター協議会、新座子育てネットワーク、博報堂、MIYAGI子どもと家庭支援プロジェクト

###### 【子どもにやさしい復興計画】

こども環境学会、子どもの権利条約総合研究所、竹中工務店、山形大学

#### ■支援物資一覧

おしりふき、エタノール消毒薬、園児用おやつ、栄養機能食品 (サプリメント・肝油)、印刷機、折り畳み傘、おもちゃ各種、お絵かき帳、色鉛筆、折り紙、大型自動車、子ども用下着、子ども用靴下、子ども用衣服上下、紙おむつ、子ども用ORS、牛乳、抗菌防臭剤、学校用備品 (教卓、教員用デスク、椅子、ワゴン、書棚、ロッカー清掃用具入、カーテン、給食用食器、救急箱、移動式黒板、ホワイトボードなど)、学校用文具類 (紙、マーカー、テープ、ファイル、ノート、教本、ドリル)、学用品 (ピアノカ、リコーダー、絵の具セット、書道セット、裁縫セット、算数セット、実験器具、天球儀、運動着、ジャージ、上下履き、紅白帽、防災頭巾、給食着、園児用制服、ランドセル、通学バック、手提げバック)、熊よけ鈴、クレヨン、乾燥機、空気清浄機、仮設トイレ、更衣室、軽自動車、原付オートバイ、子ども用ヘルメット、ガスレンジ、回転釜、牛乳保管庫設備、学童クラブ備品、生理用ナプキン、診療用具一式、コピー・ファックス複合機、スクリーン、スピーカー、扇風機 (スタンド、壁掛け用)、洗濯機、浄化槽、CDラジカセ、掃除機、授乳用仕切りシステム、自動車、スクールバス、自転車、消火器、障害児療育用品、デンターライト、手指消毒剤、データ通信キット、通学用懐中電灯、電池、卓上電気スタンド、テレビ、DVDプレイヤー、電気ポット、朝食用パン、ジュース、電気ストーブ、長靴 (子ども・大人用)、乳児体重計、乳児・児童用身長計、粘土、妊婦用ジャケット、ビタミン強化米、プリンター、パソコン、プロジェクター、保育園・幼稚園備品 (簡易プール、給食用食器、調理器具、ラグ、マット、昼寝用ラック、ワイヤレスアンプ、ボール、避難用おでかけ車、防災カーテン)、防犯ブザー、放射線量測定器、歯ブラシ (乳幼児、子ども用)、マスク、マウス、ミンソ、物置、ヨーグルト、USBメモリ、ユニセフレクリエーションキット、ユニセフ幼稚園キット (「箱の中の幼稚園」)、薬品保冷庫、ワクチン、輪転機、レインコート、ろうそく (イベント用)、冷蔵庫

※物資面と物流面等で、多くの企業・団体にご協力いただきました。詳細は、1年レポートをご参照ください。

日本ユニセフ協会は、これまでの支援の成果と被災地の現状を踏まえ、当協会が今後担うべき役割とその活動について地元自治体や団体などと協議し、現在も、「心理社会的ケア」「子どもの保護」および「子どもにやさしい復興計画」の3分野を中心に活動を継続しております。

今後数年間の継続を予定しているこれらの活動に掛かる費用は、これまでにお寄せいただきました募金でほぼまかなえる見込みです。このため、ユニセフ「東日本大震災緊急募金」につきましては、2013年3月末までの受け付けとさせていただきます。

ご支援いただきましたみなさまに、心より感謝申し上げます。



©日本ユニセフ協会/satomi matsui

公益財団法人  
日本ユニセフ協会 (ユニセフ日本委員会)

〒108-8607 東京都港区高輪4-6-12 ユニセフハウス

Tel : 03-5789-2011 FAX : 03-5789-2036

[www.unicf.or.jp](http://www.unicf.or.jp)